

# 巻頭言

広島部落解放研究所 宗教部会部会長

小 森 龍 邦

蓮如が没して五百年の節目の年が訪れてきた。日本における仏教界のみならず、思想研究の領域においても蓮如という人の行実、人びとの多くが関心を抱く年である。このときにあたって、広島部落解放研究所の宗教部会が本書の出版を計画したのは、世相が大きく混乱している社会の状況にあって、いまこそ、宗教的人間像の強く要請されていることを痛感しているからに他ならない。

いまは、混乱の時期であり、激動の時期である。いまから五百年前の激動の時期を生き抜いた蓮如の思想と行動を、それぞれの立場から検討してみることの意義は、まことに大きいものがある。

蓮如の思想は、まさに浄土真宗の宗祖・親鸞の思想を忠実に守り、教線を拡大したと評価するものも、「王法為本」「五障三従」などの「お文」「御文章」は権力への追従であり、女性への差別であったと評価するものも、それぞれの立場から、寄稿していただくことが出来たのは、いずれの立場にしろ、後世、浄土真宗の教えに蓮如の果たした役割の大きさを認めているからである。

蓮如という人の行実に肯定的であり、批判的であっても、ただ言いうることは、蓮如没後五百年という年に、これを大きく検討してみる必要は、あえて論をまたないところであろう。肯定的な人は、批判する人の

論拠にいま一度耳を傾けてみる必要がある。その逆に批判的な人は肯定論を吐かれる人の説くところに目を通してみる必要がある。

本書はこんな学問的、思想的観点に立って、さまざまな人から、論稿をよせていただいた。

そして、稲城・小森の対談、同じく玉光・小森の対談、つづいて広島県における部落解放理論研究の場において、福嶋・小森の対談も掲載させて貰った。

こうして、あらゆる角度から、蓮如という人を、われわれの思想の俎上に乗せようとしてみた。

いま日本の宗教界は、かつてない程、部落差別とか女性差別の問題について真剣な論議と行動を重ねている。広島におけるわれわれの動きが、少しでもそれに役立てばとの気持が本書出版の計画をさせたというべきである。

御寄稿いただいた方々、対談に時間をさいていただいた方々に、感謝を申し上げますとともに、本書を手にする方々にも、われわれと共通の思索をして戴いて、この激動の時期に蓮如という人の足跡をかみしめていただければ幸甚です。われわれの想いは、そこにこそあることを申し上げて、巻頭の言葉といたします。